

かなやき

# 金焼地蔵 (柳沢)

むかあしむかし、塩田の五加村に田んぼや畑をたくさん持っている大百姓の市左衛門という人がおった。古くから開けていた塩田平の真ん中あたりに大きな市左衛門さんの屋敷があり、本郷村から柳沢村の方まで田んぼを持っていた。雇人も大勢働いておった。

ある春の日、若草がすくすくと伸びはじめ小鳥の鳴き声ものどかに聞こえるころ、市左衛門さんの柳沢の田んぼには七人ほどの雇人が毎日毎日働きに出ておった。このころ市左衛門さんの家には、おきわさんという美しい女中が働いておった。年は十八、五加村の人達だれにも好かれる心のやさしい娘だった。

その、おきわさんは、毎日田んぼに働きに出ている男衆にお昼のお弁当を運んでおった。おきわさんは、普段から柳沢のお地蔵さんを深く信心しておったのでな、お弁当のうちからほんの少しだけお地蔵さんにお供えして、それから男衆のところへ届けるようにしておった。

けれども、男衆の中には、おきわさんが届けてくれるお弁当の中身が少し減っているのを知って、あまり良く思っていない者がおった。そのうちに「あの女はきつと地蔵さまの前でつまみ食いをしてから持ってくるにちげえねえ」と言いふらす者さえ出てくるようになった。

男衆は、俺達が汗水ながして働いているのに、つまみ食いをした弁当をそしらぬ顔で持ってくることはゆるさねえ、今日こそおきわのやつをひどい目にあわせてやろうと、中でも悪い連中が相談し焼け火ばしを用意して、もうくるか、もうくるかと待っておった。

こんな悪だくみがあるとは知らない、心のやさしいおきわさんは、いつものようにお地蔵さんに「どうか今日も男衆がけがもなく、病気もしないように」となんべんもおまいりしてからお弁当を運んでいった。

「さあさあ皆さんお腹がすいたでしょう。今日は美味しい煮物が沢山ありますで早くにおあがりなんでしょう」

とおきわさんお腹がすいたでしょう。今日は美味しい煮物が沢山ありますで早くに

といてお弁当をさし出した。

「毎日毎日つまみ食いをした弁当をそしらぬ顔をして持ってくるとはけしからん。これからつまみ食いをしないように、こらしめにこうしてやる」と言って、おきわさんのおでこに真っ赤に焼けた火ばしをさっとおしつけた。

おきわさんは、「ギャー」とおどろきの声をあげて泣きながら逃げ帰った。男衆の中には、これはまずいことをしてしまったわい、少しひどすぎたかな、かわいそうなことをしたと、内心は心配になったものもおった。

やがて前山寺のくれ六つの鐘が塩田平にゴンゴンとびびき渡った。心配しながら市左衛門さんの屋敷に男衆が帰ってみると、どうしたことだろう。おきわさんは、いつものように笑顔でかいがいしく元気に立ち働いているではないか。

「おつかれさんでした」と言っておきわさんの顔は美しく、そればかりかおでこには、ついているはずの焼け火ばしのあともなかった。

男衆は、ただただおどろくばかりだった。

ところが次の日に男衆が柳沢のお地蔵様の前を通った時に、このおきわさんの顔についているはずの焼け火ばしのあとが、お地蔵さんの額にくっきりと現れていることが分かったのだった。あまりのふしぎさに男衆はまたまたおどろくばかりだった。それから、男衆は心を入れかえてお地蔵さまとおきわさんをとっても大事にするようになった。

日ごろ信心深い純情なおきわさんの災難を、お地蔵さまが身代わりになって下さったことは、その後だれ一人として知らないものはないようになった。今でも柳沢にはこのお地蔵さまが「金焼地蔵様」としてうやまわれて、道ばたでおだやかな顔をして立っている。

